

# 朝鮮時代の風水からみた町の空間認識と対応方式に関する研究\*

## A Study on Spatial Structure and Countermove of village at the Feng-Shui During the Chosun Dynasty\*

金暲完\*\*・仲間浩一\*\*\*

By Kyungwan KIM\*\*・Koichi NAKAMA\*\*\*

### 1. 研究の目的と位置付け

風水思想は中国の漢時代に体系化され、韓国には新羅末に導入されたと言われている。風水思想は、自然の中に生命力があるとする自然観の上に成り立っており、陰陽の原理をもとに自然地形が持つ形状によって、色々な要素を陰と陽に位置づける。

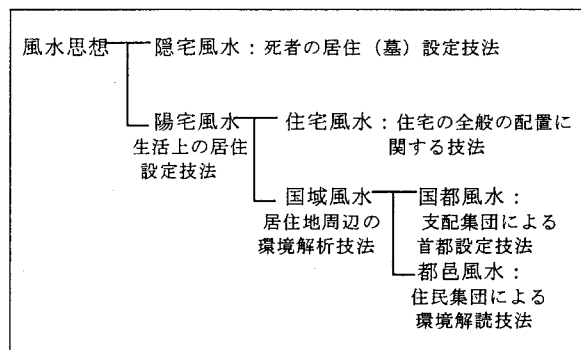


図-1 風水思想の体系と都邑風水の位置付け  
（「韓国の風水」<sup>1)</sup>を元に筆者作成）

風水は自然環境の中における居住立地の設定の理論として解釈することができ、大きく陽宅と隠宅の二つの体系から成り立っている。隠宅は死者の居住、すなわち、墓を決める風水であり、陽宅は生活している人の居住を決める風水である。そして、陽宅は住宅風水と国域風水に分けられる。

\*キーワード：風水思想、空間認識、裨補、地名裨補

\*\*外国人員，工修，九州工業大学工学研究科

（福岡県北九州市戸畑区仙水町1-1，

TEL:090-9725-4647，E-mail:comboys70@yahoo.co.jp）

\*\*\*正員，工博，九州工業大学工学研究科

（福岡県北九州市戸畑区仙水町1-1，FAX:093-884-3100，E-mail:knakama@civil.kyutech.ac.jp）

国域風水は、共同体的な村落民たちが、彼らが住んでいる空間を認識して、解析する風水思想である。国域風水を大きく分類すると、国都(kukdo)風水と都邑(doup)風水に分けられる。

近代以前の朝鮮時代では自分たちの居住空間を風水地理的に認識した結果、不満足な場合に支配集団が遷都するケースは少なくなかった。これに対して、一般民衆の住む集落が移転するケースは、戦時の例外を除きほとんどない。国都風水が逃避的な対応方式であるとするれば、都邑風水は解析によって自然条件と戦う積極的な対応方式といえる。

風水の吉凶は、藏風・得水・方位および形局などを要素で判断することになるが、これらの要素をすべてもっている吉地は珍しい。そこで、風水「凶」と判断され、居住環境の構成上不足することから補完するために用いられたのが「裨補壓勝」(bibo-apsung)という技法である。

裨補は国都風水と都邑風水の両方にみられるが、本研究では、都邑風水における裨補を対象にする。

風水思想では、自然の生命力である「気」が重要視される。気は強くても弱くても問題があるとされるため、気が強すぎるところは「壓勝」をし、弱いところは「裨補」をする。都邑風水に「裨補壓勝」がよく見られるのは、村落民が居住地を移動する代わりに裨補をして居住環境における「気」の強弱を改善したからである。

風水研究の例は日韓を問わず非常に多いが、裨補壓勝についてまとめたものは多くない。

日本における風水に関する既存研究では、多くのが風水思想の理論に関する研究<sup>2) 3)</sup>であり、その他に、文献から見た都市の風水的な立地及び空間構成に関する研究<sup>4) 5)</sup>、特定の都市を現地調査して風水思想を解釈した研究<sup>6) 7)</sup>、沖縄の風水に関する研究<sup>8) 9)</sup>などがある。

韓国における風水に関する既存研究では、日本と同じように多くのが風水思想の理論に関する研究<sup>1)</sup><sup>10)</sup>であり、特定の都市を現地調査して風水思想を解釈した研究<sup>11)</sup><sup>12)</sup>、建築の空間配置に関する研究<sup>3)</sup>などがある。

裨補に関する研究は、朝鮮半島における裨補の分類と実例に関する研究<sup>1)</sup><sup>14)</sup>がある。

村山は、裨補を山・池・森・寺・人工構造物の造営、地名の変更などがあると述べた<sup>1)</sup>。しかし、他の物理的な裨補に比べ、心理的な裨補とも言える地名裨補に関する分類や役割に關しての考察、実証は不十分である。

従って本研究では、既存研究の風水説と裨補壓勝論を基にして、韓国の町における地形と形局（4（2）で詳述する）に対しての裨補、中でも地名の変更による裨補の実施（以下地名裨補）の実態を確認する。地名裨補は、空間を改変する物理的な開発ではなく、町民の協議による意味付け技法としての自然補完行為である。本研究の目的は、韓国における地名裨補の体系の一端を明らかにし、環境に対する意味付けを重視して、今後の街づくりの一つの方法として有用な知見を得ることである。

## 2. 研究の対象と方法

### （1） 研究対象地咸安の概略

本研究の対象地は、韓国慶尚南道咸安郡とした。咸安は、慶尚南道の中心部に位置し、東に昌原(changwon)、南に馬山、西に晉州と面する。

咸安を対象地とした理由は、咸安が典型的な逆風水の地形を有してからである。韓国の風水地理思想では、北に高い山があり、南に低い地形があつて、水が流れるのが理想的な地形のパターンである。しかし、咸安の場合は、南に餘航山(yohangsan)という744mの高山が存在しており、五峰山(obongsan)(525m)防禦山(bangosan)(530m)という山が東西にある。河川は南の餘航山を源として北に流れる咸安川(hamanchun)があつて南川と交流する。風水思想から見ると気が咸安の外に流れてしまう地形である。北側は平地であつて、北からの悪気が直接入ってしまい、理想的な風水都市とは地形要素の配置が反対である。従って、咸安では、

風水的な悪条件を人為的に変えるため、裨補壓勝の実施例が多く見られる。



図—2 咸安の地図

(韓国国立地理院提供の1/250,000を元に筆者作成)

### （2） 咸安の沿革

三韓時代に弁韓の地であり、駕洛國の6伽倻の中で阿羅伽倻の領域であつた。新羅慶徳王の時に咸安郡と言われることになった。高麗時代である995年には咸州、1018年には咸安郡、1172年には咸安県、1374年には咸安郡、朝鮮時代である1505年には咸安都護府、1506年には咸安郡になった。

このように、咸安は風水思想が朝鮮半島に導入される前から都市として形成されていた。

1914年には上奉(sangbong)・下奉(habong)・上寺(sangdung)の3面が晉州(chinjoo)に隸属されて、靈山郡(yongsan-gun)の吉谷面(gilgok-myun)泗村里(sachon-ri)・金岩里(gumam-ri)の一部と馬山府(masabu)の内西面(neaso-myun)禮谷里(reikok-ri)の一部を合併した。1933年には竹南面(jooknam-myun)が郡北面(goonbuk-myun)に編入された。1973年には咸安郡代山面(deasan-myun)山西里(sansu-ri)が伽倻面(gaya-up)に編入された。1979年には伽倻面が邑に昇格されて、2001年現在、伽倻邑(gaya-up)・咸安面(haman-myun)・郡北面(gunbok-myun)・法守面(bupsoo-myun)・代山面(deasan-myun)・漆西面

(chilsu-myun)・漆北面(chilbuk-myun)・漆原面(chilwon-myun)・山仁面(sanin-myun)・餘航面(yohang-myun)などの1邑9面になっている。

### (3) 用いた史料と調査方法

‘慶尚道地理志(1425年)’<sup>15)</sup>、‘新增東国輿地勝覽(1530年)’<sup>16)</sup>、‘咸州誌(1587年)’<sup>17)</sup>、‘擇里志(1714年)’<sup>18)</sup>、‘慶尚道邑誌(1832年)’<sup>19)</sup>の文献に載っている図版や文章による記述を調査し、咸安郡の集落の空間構成と地名を確認した上で、現地踏査を実施した。調査の詳細は4章で述べる。現地の踏査は2002年3、5、8月と2003年1、4、7、10月に計7回行った。

## 3. 裨補の定義と構成

### (1) 裨補の定義と概念

村山は「裨補とは、地力の衰微や欠陥がある地に対して、新しい吉地を求めて移動するではなく、舊地の欠陥を裨補して、地気を変え地力を回復して旺盛させる、人力による自然の調和である。」<sup>1)</sup>と述べている。つまり、裨補という技法は、風水法に限らず一般的概念としての自然環境の補完行為であり、自然の地理的興件に人為的な行為を行って居住環境の改善することにより、理想郷を構成することを目的としている。

裨補の種類には「佛教的裨補」と「民間信仰的裨補」と「風水的裨補」がある<sup>1)</sup>とされる。以下では、それを簡単に説明する。

佛教的裨補は、裨補の動機と裨補の手段が佛教的裨補形態で、信仰的な性格をもっている。新羅時代の寺・塔などが代表的なものである。高麗時代まで全国的に流行した。朝鮮時代になると佛教の弾圧によって衰退した。

民間信仰的裨補は、村落で行われたもので、地方によって異なる裨補手段と裨補形態をもっている。伝説や昔話などに残っている場合が多い。高麗時代には佛教的裨補と融合することが多かったが、朝鮮時代になると風水的裨補と融合することが多くなる。

風水的裨補では、裨補の動機と裨補の手段・過程・立地すべてが風水思想に基づいている。高麗時代の初期から始まって、朝鮮時代になると色々な形

態と機能をもったものが出てくる。その中には風水思想だけでなく佛教と民間信仰が融合したものまであった。裨補は多様化し、人々の生活に密着した技法として定着した。崔元碩は「人間は自然(地気)の影響を調節する調整者としての位相を持つ。すなわち、風水は自然の祥瑞な影響下にありうる場所と方法を表すが、裨補は人間が環境と調和して住める適地に育てる方法を教えている。」<sup>14)</sup>と述べている。

### (2) 裨補の機能と意義

前説したように、裨補とは自然と人間が調和することを目的とした自然環境に対する補完行為であり、その具体的技法には、山・池・森・寺・その他構造物の造営に加えて地名の変更等がある。

住民は、裨補という技法を行使することによって、自然に対する居住環境の改善と不安要素の除去を実現する機能を持つことが可能であった。

住民は、裨補の実施を通じて、社会集団としての心理的な安定を図り、自然との調和を実感することができる。この点が居住環境を計画する立場からみたと、裨補の大きな意義であると言うことができる。

次章からは、三つの裨補思想の中で、朝鮮時代に繁盛、密着した風水的裨補、その中でも町民の協議によって実施された地名裨補という技法を解明していく。

## 4. 咸安における風水地名と裨補

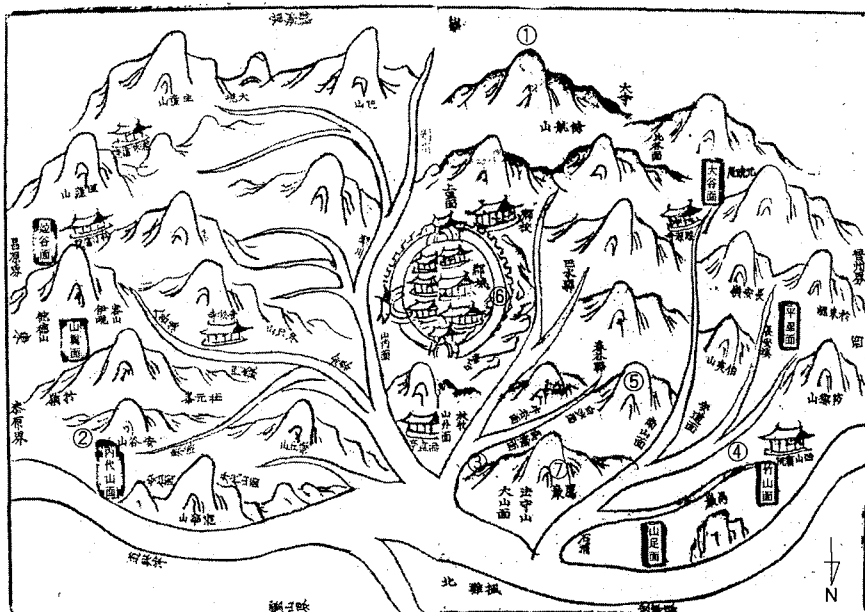
裨補が行われた実態を調査するため、まず古文獻からは咸安の昔の地名と位置、風水的・裨補的な内容を有する記述<sup>1)</sup>を探した。そこから抽出した地名について、慶尚道邑誌の中にある咸安郡邑誌の絵図の中で地名の位置を確認した。その後、咸安での現地調査を実施した。現地では、地名の由来、伝説、地名の変遷、行政地名と呼び地名の差などを地元住民からヒアリングした。また、地名の付けられた対象物件とその周辺の写真も撮影した。さらに、朝鮮時代の絵図と今の地形図を比較し、地名の変更などの有無について調べた。調査の結果、明確になった地名裨補の方法について以下で説明する。

表－１ 咸安の風水地名の実例

| 地 名                  | 今の場所                    | 風水的な解析                                                                                                                                                                                                                                         |
|----------------------|-------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 餘 航 山<br>(yohangsan) | 餘 航 面<br>(咸安の南)         | 山が余って行く山という意味をもっている。他の由来には、本来は海であり、港になる山という意味もある。実際に南に海がある。<br>風水都市の空間構造では南側から川が流れ込むことが理想的だと言われる。しかし、咸安の南側には餘航山(744m)という高い山があったためその山を変える必要があった。それで南側を平地あるいは水の地形に変えようとする地名裨補を行った。                                                               |
| 代 山<br>(daesan)      | 代 山 面<br>(咸安の北)         | 山の代わりと言う意味をもっている。理想的な風水の空間構造から見ると北は高いところである。しかし、咸安の北側は平地であって、高い山が必要であった。そこで、代山面という広い範囲に代山と言う地名を付けた。それで咸安の北側が山がある地域に変えたという心理的な意味をもつことになった。<br>今は朝鮮時代の大山面の位置にある。大山面と代山面の韓国語の発音が同じであることで統合されたと思われる。                                               |
| 大 山<br>(daesan)      | —<br>(昔は大山面)            | 北の高い山を象徴する裨補である。代山と同様に咸安の北側を高くするための地名裨補である。風水の空間構造的には、北の高い山である。咸安の主山とも言われる。                                                                                                                                                                    |
| 竹 山<br>(zuksan)      | —<br>(昔は竹山面)            | 竹の山の意味である。朝鮮時代にはここに竹林が広がったと伝われる。<br>竹は風水思想では、北からの悪い気を防ぐための風水林とその地域の気を保つための裨補林としてよく使われたものである。造山の代わりに森を作ったという例もあるので、竹山は造林・造山の裨補とも言える。<br>それをそのまま地名裨補にした事例である。                                                                                    |
| 南 山<br>(namsan)      | —<br>(昔は南山面)            | 南にある山の意味である。今も咸安の北側に地名は残っているが、朝鮮時代の位置とは異なる。北にある地域にもかかわらず南山と命名した。朝鮮時代は、ここを風水の空間構造的に鎮山と言った。                                                                                                                                                      |
| 末 山<br>(malsan)      | 伽 倻 邑<br>(gaya-up)      | 山と命名された地名の中で一番南にあるところである。ここも咸安の北側にある地域である。現在咸安の中心地であり、郡の役所があるところである。風水的に咸安の明堂とも鎮山とも言う。                                                                                                                                                         |
| 法 守<br>(bupsoo)      | 法 守 面<br>(bupsoo-myun)  | 水を治るという地名である。風水では、水が町に流れ込むことが理想である。しかし、咸安はその反対で、咸安川(haman-chun)は南の餘航山から源として北に流れて、気も咸安の外に流れてしまう地形であるため、この咸安川を治る必要があって命名された。朝鮮時代咸安は咸安川の氾濫で洪水に被害が多かった地域であったが、今現在は豊かな農業地域である。<br>‘水’ではなく‘守’をしたのは韓国では守と水の発音が同じであるからであるし、咸安川を守るという意味ももつようにしたという説もある。 |
| 飛 鳳 山<br>(bibongsan) | 咸 安 面<br>(朝鮮時代の中心地)     | 咸安郡咸安面にある山である。朝鮮時代は、ここ咸安面が中心地であった。鳳凰が飛んで行く形局も山である。16 世紀郡守であった鄭寒岡 <sup>2</sup> (Chung Hang-gang)がこの山が飛鳳形といったと言う。鳳凰が飛んで行くと町に不吉なことが起こると信じた。                                                                                                       |
| 鳳 城<br>(bongsung)    | 咸 安 面                   | 鳳凰の家と言う意味をもっている。朝鮮時代は咸安の中心地であって、役所があったところである。役所の跡地が鳳城の中心であったが、今は学校になっている。                                                                                                                                                                      |
| 鳳 林<br>(bonglim)     | 咸 安 面                   | 鄭寒岡が鳳凰の餌になるように周囲に竹林を造ったと言う。今は痕跡しか残っていない。典型的な裨補林とも言える。裨補林を作った後、地名裨補をした例である。                                                                                                                                                                     |
| 徳 村<br>(dukchon)     | 郡 北 面                   | 村の入口である郡北小学校から村までに長い森があり、この森のお陰で村が繁盛するといういわれから、徳村と言う。森は風水林とも裨補林ともいえるが、徳村という名称は、地名裨補によって付けられたものである。                                                                                                                                             |
| 碑 神 台<br>(bishindae) | 郡 北 面<br>(gunbuk-myun)  | 徳村の中にある地名である。碑神台は突岫(sotdae)であり、その上に木で作ったカラス3匹をのせた。これは徳村が風水上(形局論)、行舟形であるから帆の役割をするようにしたものである。                                                                                                                                                    |
| Oh Mi 山<br>(uhmisan) | 漆 北 面<br>(chilbuk-myun) | uhmi は慶尚道の方言で、お母さんの意味である。山の形がお母さんのチマ(スカート)と似ていることで uhmai 山と言う。風水的に、子どもがよく生まれて、よく育てるという。形局地名の典型的な事例である。                                                                                                                                         |

## （１）咸安の地名裨補

前述のように咸安の地形は南高北低で、理想的な風水の地形とは逆の状態である。朝鮮時代、咸安の村落民たちは自分たちの居住空間が、逆風水の地形であることを把握し、それを解消するため、色々な物理的な裨補<sup>3</sup>をした。しかしそれでも、逆風水の地形を変えることは無理であり、従って、それに対しては地名裨補で対応した。物理的な地形そのものの変化に加え、意味的な「地



〔①：餘航山 ②：代山 ③：大山 ④：竹山 ⑤：南山 ⑥末山 ⑦：法守〕

図－２ 咸安郡邑誌（慶尚道邑誌を元に筆者作成）<sup>19)</sup>

形のもたらす構造」を変化させる技法を併用したと考えられる。つまり、意味的なイメージ構造の操作によって、居住環境の質の改善を試したといえる。その事例として確認できたのが表－１である。

地名裨補は、咸安全域に広く分布していることがわかった。その中でも朝鮮時代に咸安の中心であった、咸安面鳳城里において多く確認された。これに関しては、（２）節の（b）形局地名裨補で説明する。

咸安において朝鮮時代に実施された地名裨補は、その後、現代に至るまでの間に行政地名の変化に伴って、変化あるいは消滅したものも確認された。具体的には、朝鮮時代にはあった地名が行政地名の変更でなくなった例（大山・竹山・南山など）、漢字が変わった例（大山が代山になったこと）、意味が変わった例（今は餘航山が二つの意味をもっていること）、純韓国語を漢字に変換したとき変化した例（法守の‘守’が‘水’の意味であること）、本来の意味ではなく包括的に変わった例（山の形がスカートと似ていることで、おかあさんの山の意味である Uhmi 山になったこと）などが確認された。

## （２）地名裨補の分類と役割

咸安の風水地名の実例である表－１の地名を参考に地名が使われた場所と集落との位置関係と、韓国

の風水思想の中で「理解しやすい」<sup>10)</sup>とされる形局論による判断を表－２に表した。

崔昌造は、韓国の風水思想<sup>10)</sup>で「形局論は、地勢を全般的に概観する技法である。宇宙の森羅万像は‘理あれば気あり、形あれば象あり’であるために、外形物体にはその形象に相応する気が内在しているという概念をその原理とする。」と述べた。つまり、形局の判断とは、地形や形をもつ事物の輪郭線に対して、その形態に相応する気の存在を確認するための意味づけであると考えることができよう。

表－２ 地名の位置（図－２参考）と形局の判断

| 地名     | 位置      | 形局の判断 |
|--------|---------|-------|
| 餘航山    | 咸安の南    | —     |
| 代山     | 咸安の北    | —     |
| 竹山     | 咸安の北    | —     |
| 大山     | 咸安の北    | —     |
| 南山     | 咸安の北    | —     |
| 末山     | 咸安の北    | —     |
| 法守     | 咸安の北    | —     |
| 飛鳳山    | 集落（鳳城里） | 鳳     |
| 鳳城     | 集落（鳳城里） | 鳳     |
| 鳳林     | 集落（鳳城里） | 鳳     |
| 徳村     | 集落（徳村里） | 舟     |
| 碑神台    | 集落（徳村里） | 帆     |
| Uhmi 山 | 集落（漆北面） | スカート  |

表一2より、風水の基本概念で説明できる場所に位置している地名と、集落の近くに存在している形局で判断できる地名の大きく二つに分かれることが判明した。

そこで風水の基本概念の論理で判断できるものを「象徴的地名裨補」、形局論で判断できるものを「形局地名裨補」として、風水地名裨補を二つに分けて説明したのが、次の(a)(b)である。

#### (a) 象徴的地名裨補

渡邊<sup>9)</sup>によると風水の概念で説明できる空間を象徴的空間とした。従って、本研究でも風水の概念で説明できる地名裨補を「象徴的地名裨補」と名付ける。

象徴的地名裨補は、都邑の空間構造が理想的な風水都市の空間構造と異なる場合、すなわち、風水の基本概念と異なる場合、それを改善するために行うものである。物理的な裨補とは違って、地名を呼ぶことによって地形を変えようとする集団の心理を表すもので、心理的な裨補とも言える。咸安の場合は逆風水の地形を改善するために他の地域より多く見られる。

表一2のように、風水の基本概念を構成する場所にあるので、個別の集落の位置とは関係なく、朝鮮時代の官庁であった鳳城を中心に風水地理思想が適用された。そのため、集落からは遠い場合が多い。末山・代山・法守の場合、今は集落の中に存在しているが、朝鮮時代において咸安の中心であった咸安面鳳城里を中心として見た場合は周囲となる。今は風水の解析が変わって、末山が中心になっている。餘航山の場合は、朝鮮時代に鎮山<sup>4)</sup>とも言われたことがあった。

#### (b) 形局地名裨補

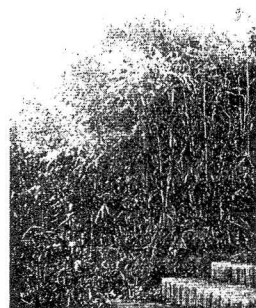
風水思想の中で形局論を基にして地名を付ける技法を「形局地名裨補」と呼ぶことにする。

形局地名裨補がある位置は、集落の近く、すなわち、集落の中心から見える範囲である。風水の基本概念を構成する場所に位置している象徴的地名裨補に比べると、町のあちこちにある集落から見える範囲において、個別の集落にとって形局判断上重要な事物を個別に意味づけしているため、咸安全体に散在している。

朝鮮時代に咸安の中心であった、咸安面鳳城里で見られた飛鳳山・鳳城・鳳林の位置関係を表したのが図一4と写真一1, 2, 3である。



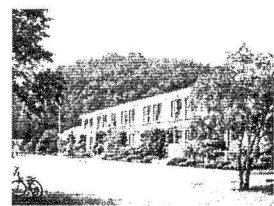
図一4 鳳城の地図<sup>5)</sup>



写真一1 鳳林



写真一2 飛鳳山



写真一3 咸安小学校

集落のシンボルであり、守護的な存在であった鳳凰が山の地名になったのが「飛鳳山」(写真一2)<sup>6)</sup>である。その山が、鳳凰が飛んで逃げるといふ形局であるので、集落の安寧のため、飛鳳山の周囲の地名を鳳凰の家という意味で「鳳城」(図一4)とした。そこは学校になっているけど、朝鮮時代には官庁が置かれたところ(写真一3)<sup>7)</sup>である。それだけではなく、飛鳳山の中には、朝鮮時代に郡守であった鄭寒岡が鳳凰の餌になるようにと思って裨補林を造り、地名も「鳳林」と付けた竹林の痕跡が残っている。(写真一1)<sup>8)</sup>

図一4より、形局地名裨補は集落の大きさによって異なるものの、集落にある山を中心に統率のとれた道具たてとして実施されていることが確認された。

地域によっては同じ対象でも、異なる地名が付けられることもある。その理由は、同じ対象が異なる集落によって、異なる形局に見えるからである。その為、行政地名として使われない場合もある。

## 5. 結論

本論文は、風水的な地名に関連して、既存研究における地名裨補の位置づけを明らかにし、その体系と具体的技法について以下の知見を得た。

- 1) 咸安の地形は逆風水の地形である。その為、朝鮮時代の村落民は自分たちの居住空間を風水地理的に改善するため、造山、造林、人工池、人工構造物などの物理的な裨補をしたことがわかった。
- 2) 朝鮮時代、咸安の人々は逆風水の地形を変えるため、地名裨補も行ったことがわかった。
- 3) 地名裨補は大きく「象徴的地名裨補」と「形局地名裨補」の2分類に分けることができる。
- 4) 「象徴的地名裨補」は、都邑の空間構造が理想的な風水都市の空間構造と異なる場合、それを改善するために行うものである。咸安では、個別の集落の位置とは関係なく、朝鮮時代の官庁があった鳳城を中心として、風水の基本概念し従って適用された。
- 5) 「形局地名裨補」は、集落の近く、すなわち、集落の中心から見える範囲に位置していることが確認できた。また、個別の集落にとって形局判断上重要な事物を個別に意味づけしているため、咸安全体に散在している。

## 注

1. 古文獻には、鎮山、案山、主山という風水的な用語が表記されており、裨補林、造山という裨補的な用語も表記されている。
2. 朝鮮時代咸安の郡守で、慶尚道邑誌の咸州誌を作成。
3. 咸安では、造山の形態である鳳城池・入谷池などの人工池が咸安の南側に多く見られる。南が水のようにするためであった。造山の形態である咸安山城と、裨補林として造成された竹林や松林は咸安の北側に多く見られる。これは、北が山のようにするためである。
4. 鎮山は、風水思想の中での用語で、その町の代表的な山を表している。普通は北にある高い山に付けられるが、餘航山の場合は南にあるのにも関わらず呼ばれた。
5. 韓国国立地理院提供の 1/25,000 を元に筆者作成。
6. 官庁は風水の基本概念上中心部（明堂）に位置していると言われている。<sup>1)</sup>

7. 鳳の餌になるように造られた竹林の写真。
8. 南東側から眺めた飛鳳山の写真。

## 参考文献

- 1) 村山智順：朝鮮の風水、朝鮮総督府、1931
- 2) 黄永融：風水都市、学芸出版社、1999
- 3) 張翠萍：風水別称から見た風水の原点と本質—都市計画における風水思想の基礎研究—、日本建築学会計画系論文集 No.491、1997.1
- 4) 崔童植：絵図描写に見る李朝期全羅道の城郭都市の立地及び城郭形態に関する風水地理的研究—実測地形図との比較—、日本都市計画学会・都市計画 228、2000.11
- 5) 澁谷鎮明：朝鮮半島における風水思想説を用いた地形認識、歴史地理学 37-3、1995
- 6) 朴賛弼：台湾の集住空間構成に於ける風水思想の環境要素に関する研究—旗山、美濃、南埔、北埔集落を中心に—、日本建築学会学術講演梗概集建築計画（2）、1996.9
- 7) 朴賛弼：韓国済州島における城邑集落に関する研究—風水思想からみた集住空間に関する研究—、日本建築学会計画系論文集 No.497、1997.7
- 8) 椿勝義：集落の風水史料及び古地図に基づく八重山地方の集落坐向—風水思想による沖縄の集落空間に関する研究—、日本建築学会論文集 No.500、1997.10
- 9) 渡邊欣雄：風水思想と東アジア、人文書院、1990
- 10) 崔昌造：韓国の風水思想、民音社、1984
- 11) 芮明海：鮮時時代の空間構成に関する研究、大韓建築学会論文集計画系 18 巻 7 号、2002.7
- 12) 金暉完：A Case Study on the application of the Feng-Shui in Haman、Landscape Frontier International Symposium 2002、2002.10
- 13) 朴時翼：風水地理と現代建築 技文堂、1992
- 14) 崔元碩：韓国の裨補風水論、大韓地理学会誌 37-2、2002.6
- 15) 慶尚道地理志、1425
- 16) 韓国学文献研究所：新增東國輿地勝覽（1530 年）、亜細亜文化社、1983
- 17) 咸州誌、1587
- 18) 李重煥：擇里志（1714 年）、漢陽出版、1996
- 19) 慶尚道邑誌（1823 年）、亜細亜文化社、1982

---

## 朝鮮時代の風水から見た町の空間認識と対応方式に関する研究\*

金暎完\*\*・仲間浩一\*\*\*

本研究は、西洋の自然支配の都市計画ではない東洋の伝統的な自然保完である裨補壓勝（bibo-apsung）を用いた、自然と人間が調和する方法に関する研究である。裨補壓勝とは風水の対応方式である。風水の吉凶は、藏風・得水・方位および類型などを要素で判断することになるが、これらの要素、すべてをもっている吉地は少ない。そこで、風水上「凶」と判断され、居住環境の構成上不足することから補完するために用いられたのが「裨補壓勝」という技法である。裨補壓勝の方法には、山・池・森・寺・人工構造物の造営、地名の変更などがある。

本研究では、既存研究の風水説と裨補壓勝論を基にして、逆風水の地形である韓国の咸安郡における地形と形局に対しての裨補、中でも地名の変更による裨補の実施の実態を確認した。その結果、風水の基本概念の論理で判断できるものを「象徴的地名裨補」、形局論で判断できるものを「形局地名裨補」として、風水地名裨補を二つに分けることができた。

「象徴的地名裨補」は、都邑の空間構造が理想的な風水都市の空間構造と異なる場合、それを改善するために行うものである。

「形局地名裨補」は、集落の中心から見える範囲に位置していることが確認できた。また、個別の集落にとって形局判断上重要な事物を個別に意味づけしている。

---

## A Study on Spatial Structure and Countermove of village at the Feng-Shui During the Chosun Dynasty\*

By Kyungwan KIM\*\*・Koichi NAKAMA\*\*\*

Feng-shui has a special meaning in the history of northeastern Asian societies and geography. Although geography of the present has been influenced by scientific Western geography, it is undeniable fact that Feng-shui has the harmonious rapport between the human and the environment. The 'Feng-shui' theory is composed of four factors like mountain, water, direction, human being. The purpose of this study is understanding Korean traditional 'Feng-shui' theory and searching for the method of utilizing it city planning.

The subject of study is Haman in Korea. Haman is not good place in terms of Feng-shui. But, they had to live in Haman. They changed their village in terms of Bibo. Therefore, they think they are located on blessed situation in terms of Feng-shui.